

小京都中村の歴史（その1）

はじめに

四万十川流域は平成二十一年二月、流域全体が文部科学省の「重要文化的景観」に選定された。重要文化的景観の指定にあたっては見た目の美しさだけでなく、人間と自然との関わりの積み重ねが評価され選定されており、四万十川下流域では下田が選定されている。

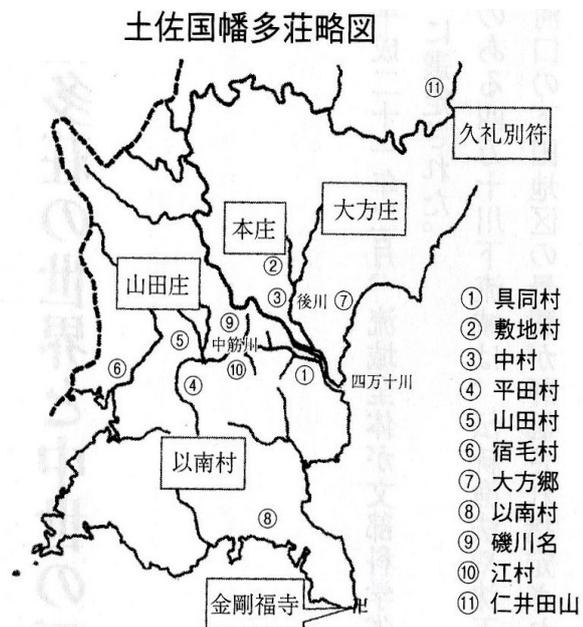
ところで中村は、市街地が清流四万十川と後川に囲まれ、山紫水明の美しい景観に恵まれているだけでなく、歴史的にも室町後期、土佐に下向し、所領・幡多荘の直務（じきむ）を行った在国公家・一条氏の館を中心に庶民の居住する市町（いちまち）が形成された。また、中村の市街地から後川と東山を望む景観は、京都鴨川と東山の景観に地形的にもよく似ており、まさに「小京都」の名にふさわしいと思われる。本稿では小京都中村の景観の基層が形成された中世（鎌倉、南北朝、室町、戦国）の中村の歴史を一条家の荘園経済の側面を中心にたどってみたい。

一条家の荘園・幡多荘と中村

一条家と中村のある幡多郡の関係は鎌倉時代にさかのぼる。鎌倉時代、土佐は、朝廷の政治を補佐する摂関家一条家の知行国であった。知行国は、朝廷よりその国の支配が知行国主である摂関家や将軍家などの有力な公家や武家に任された。知行国主は家来を国司に推挙し、国衙領（荘園以外の土地）の収入を自家のものとした。土佐の中でも幡多郡は最初は九条家領荘園として立荘されたが、建長二年（一二五〇）、九条道家より四男の一条実経に伝領され、以後一条家領幡多荘として戦国期に至る。

幡多荘の領域は、幡多郡のほぼ全域（本庄・大方庄・山田庄・以南村）と加納として高岡郡・久礼を含んだ広範囲な地域であった。（図参照）鎌倉期の幡多荘と中村に関する史料として、一条家の祈願寺であった足摺金剛福寺の「金剛福寺文書」がある。それによると、正安二年（一三〇〇）、金剛福寺は回禄（焼失）したが、再建のため人々に造寺・造仏の寄進を勧める勸進活動が展開された。

一条家は金剛福寺の再建のため、幡多荘の村々に官米七十石を奉加（寄進）するよう命じ、村々に奉加官米を割り当てている。具同村、敷地村、中村、平田村、山田村、宿毛村、大方郷、以南村、磯河名、江村、仁井田山の幡多荘の十一の村々が奉加している。ここに挙げた村々の中に具同村や敷地村と並んで中村が見える。（図1参照・番号は筆者による）幡多荘が成立した鎌倉期以降、四万十川と後川の両河川に挟まれ、四万十川流域の水運と交通の結節点であるという地理的条件から中村はしだいに幡多荘の荘園経済の中心的村落になっていったのではないだろうか。



正安2年（1300）金剛福寺奉賀米供出村の分布